福島第１原発と放射能汚染のいま

３月 14 日午後、写真のうずみ火講座 2020 に出かけた。会場は大阪市立中央図書館のすぐ近くの西区民センター。図書館の再開を待ち望みながら会場へ向かった。コロナ・ショックにより、こうした催しの多くが中止になるなか、自粛せずに開催した主催者に、まずは感謝したい。

講師は京大複合原子力科学研究所(前身は原子炉実験所)の今中哲二さん。今中さんの話をお聴きするのは２回目だが、原発事故の直後から現在まで、飯館村など現地を調査されており説得力がある。原発事故から９年、放射能汚染のいまを知りたくて参加したが、私の期待に応えるものだった。質疑を含め「さわり」だけでも紹介したい。

今中さんは冒頭に、現在のコロナ問題に対する政府の対応は、９年前の原発事故直後と似ていると語る。深刻な事態に対して、政府の誰が取り仕切っているかが見えない。主催者からの要請もあり、福島原発のまえに伊方原発と上関のいまを紹介する。

今年１月 17 日、広島高裁は伊方原発３号機の運転差し止め仮処分を決定した。写真のように、伊方原発については 4 裁判所で裁判が進行している。この原発問題は、中央構造線の活断層と阿蘇山噴火である。伊方原発は、今中さんが大学院時代から関わってきた。ここから 50 ㌔のところに、上関原発が計画されている。原発予定地は狭く､敷地周辺に反対派の小屋(原子炉から 300m と 500m)がある。祝島の漁師さんとカヤックの若い衆の反対など。

2011 年３月 11 日 14 時 46 分、東日本大震災が発生し、その後に大津波が襲来した。「きっかけは地震・津波だったが福島原発事故は人災だ!」と。原発事故では､「とめる、ひやす、とじこめる」が大切だが、「とめる」ことはできたが､津波で外部電源が喪失して「ひやす」「とじこめる」ことができなかった。問題は外部電源の喪失である。

海側にタービン建屋、その奥に原子炉建屋が並んでいる。真中あたりから 1～4 号機が並ぶ。そのうち１号機と３号機が爆発を起こす。１枚目の写真のように、放射能汚染が東京など関東地方まで広範囲に広がった。４号機の使用済み燃料プールも危機的な状況にあった。チェルノブイリとの違いは、福島第１原発では地下水が流れ込んでいることだ。(続)

(2020 年３月 17 日)